



首都圏の制作者が多数参加

ニーがある。そこは演劇の状況としていちばん違うところですよ。

小室 飛ぶ劇場を観て悔しがっている人は多かったですよ。動きながら演劇をやっているという状況はたぶん一緒に、不便な点も同じような環境だと思うんですが、そんな中で「あそこまですごいセットを持って全国7か所も回ってしまおうか」と悔しがっている人と、「がんばろう」と思っている人がいました。

高崎 同じような人が福岡にいましたよ。同じくらいの規模の都市で、イナダ組や千年王国のクオリティの芝居を観て、地域にいることは言い訳にならないという声を聞きました。地元でやっている役者がそう言っていました。東京から福岡に来る劇団って、商業レベルでやっているのか、小劇場レベルで来ているのかって、福岡にいると見分けがつかないですけど、札幌から福岡に来る劇団は商業じゃない。同じ規模の都市でやっている中で、大変励まされたという声はよく聞きます。

ネットを駆使したライブ中継

——全く知らない地域から全く知らないカンパニーが来て、それをどうやって売っていくかという苦労を伺いたいのですが、今回はプロモーションでかなり工夫されたと聞いています。

小室 イナダ組の公演に関しては、現地プロモーターのピクニックさんに依頼して、イムズホールとの提携を取っていただいたり、懸垂幕を無料で掲出していただきました。さらにFPAPが企画して、イナダ組の4月に行なわれた最新作をぼんブラザホールで上映し、その模様を札幌にネット中継して、稽古中のイナダ組と質疑応答することをしました。

高崎 最初にDVDの上映会をするんですね。その後、インターネットで札幌と福岡を直接つないで、福岡の観客とイナダ組の人たちが実際にアフタートークをしました。距離が離れているのに映像でつながって話すと、すごく盛り上がりよかったです。

小室 自分たちの作品が受け入れてもらえるのか、劇団のほうでも初めていく土地って不安だと思うんですね。そういった意味でも受け入れられたという安心感がありました。

高崎 元々は福岡市の隣の太宰府市にまだかびあという劇場がありまして、そこがやり始めた企画なんです。そこはまずDVDの上映会をして、演出家の方と地元の演劇人と劇評家の扇田昭彦さんがトークするという企画です。そこではインターネット中継ではなくリアルなトークですが、私の頭の中に映像のライブ相互中継というのがあり、結び付いてこういう企画になりました。これだと遠くから人を呼ばなくていいですから、旅費も全然かからないですし、上映もプロモーションを兼ねますので、DVD使用料も不要です。予算自体は1回数万円のレベルですね。だから東京のカンパニーが福岡公演をするときにFPAPでライブ中継をやってくれないかと言われたら、ぜひやらせていただきたいと思います。

——地元マスコミの反応はいかがでしたか。

高崎 福岡だとマスコミとの距離が大変近いんですね。東京のAfro13という劇団が2月に福岡公演をするので、前乗りしてマスコミ回りをしているのですが、制作の方がマスコミの反応がとて面白いとおっしゃっています。新聞に載せるネタがない時期だったのかも知れないですが、東京だと新聞社に行ってもなかなか相手にしてもらえないけれど、福岡だと大変距離が近いそうです。

小室 札幌はもう全然……。情報誌関係は演劇情報を載せられないので、壁があります。新聞は載るとお客さんが増えたりするのでがんばるのですが、なかなか難しいです。今回の企画もぜひ福岡の新聞に取り上げていただきましたが、札幌は最初の一回だけでした。



撮影/高橋克己

作品そのものも素晴らしいけれど、飛ぶ劇場の持つ

“劇団力”の素晴らしさも思い知らされました。初雪の便りが聞こえ始めた11月初旬の札幌。劇団創立20周年記念ツアーとはいえ、4tロングのトラックでフルスケールの作品を持って海を二つ越えてやってきた地域演劇のトップランナーとも呼べる飛ぶ劇場の公演は、札幌の演劇人たちに大きな衝撃を与えました。自分たちと同じ境遇で演劇活動をする人々がこまごまやっという現実を突きつけられ、札幌の演劇人の意識はちょっと変わったのではないかと

います。仕事があるし、とか、地方だから、とか、言い訳は通用しない、やればできるのだ、と。中にはひどく悔しがっている人もいて、今後の札幌演劇界の発展に期待が持てます。

初日の終演後には、「地域の劇団が旅に出る理由」と題したシンポジウムを開催。話は「地域のジレンマについて」へ。地域ではわかりやすさを求められ、東京では新しい表現を求められる。非常に語弊のある言い方だとは思いますが、地域の劇団がその感覚に縛られている感には否めないと思います。いかにこの両方を納得させる振幅の広い作品を作ることができるか、それも現在の地域演劇の課題であると考えます。(小室明子)



現地と情報を密にしてほしい

——会場に、千年王国制作者の青木美由紀さんがいらっやっています。青木さんにカンパニー側として感想を伺いたいのですが、実際にいかがでしたか。

青木 正直言って最初は不安でした。どのような演劇が好まれるのか、前情報として多少あったんですけど、詳しい話は全くわからず、どのような方が手伝ってくださっているのかというのも、実際お会いするしかありませんでした。でも、いい舞台をつくって持っていったらどこでも通じるんだなと思いましたね。そこは簡単でした。それより、行くこと自体が難しいことが悔しいです。

お金がなんとかかなりそうだったら、思い切って行ってみる。行かなきゃわからないものってすごくあると思います。——小室

高崎 青木さんは最初私と会ったときに、どうも「あいつは怖いヤツだ」と思っていたらしいです。芝居が終わったら「本当はいい人なん



ラウンドテーブル

12月に行ったシンポジウム。千年王国・橋口幸絵さんと空間再生事業 劇団GIGA演出家の山田恵理香さんはこの日が初対面でしたが、そうとは信じられないほど打ち合わせから大盛り上がり。2人とも演出の仕事で「産婆」と例えるなど、考え方、演出家としての経歴にも共通項が多く、特に札幌に同世代の女性演出家がない橋口さんにとってはとてもいい出会いになったようです。詳しく書くには字数がとても足りませんが、この日、橋口さんが語った「私たちは健康である」という言葉、これが今後の地域演劇のキーワードになる気がしています。

翌1月、劇団千年王国公演。本当は



だってわかりました」って言っていただいて、それがいちばんうれしかったです。

小室 情報を劇団に伝えるのは重要ですね。

高崎 連絡を密にするっていうのは大変重要ですね。泣きつつか、これがわかりませんか、売れていませんとか、情報来ないと受け入れ側は動きようがないんですよ。例えば写真とか宣材とかもどんどん使いたいのですが、「使っていていいですか」と訊くほど義務感はないですし、劇団側から「使っていていいですよ」と言ってほしいです。チケットの売れ行き状況なんかこまめに提供していただきたいし、用がなくても1週間に1回は近況報告するぐらいがいいのかなあとと思います。

プロモーターと商業レベルでやれるところはそこまでなくてもいいかなと思うんですけど、現実の人間関係を中心に回っていくときは、その辺の情報の密さが重要になってくるのかなあとと思います。

旅は新しい観客に出会うこと

——「Meets! 2007」は、カンパニーの手打ち公演を二つのNPO法人が背中を押して実現したという体制だと思いますが、他地域に対しても応援していく気持ちはありますか。

高崎 動員の効率性ということでは、当然人口の多いほうが圧倒的に有利で、そういった意味では地域に出ればいけばいほど経済的な効率性も落ちていくし、商業的にはなにもいいことはない。そんな中で、違ったお客さんに会えるというのがあると思うんですね。福岡のお客さんはもうみんないいお客さんですよ。擦れてないですね。「いいものはいい」とてらもなく言ってくれるので、そういう出会いに価値を感じるかどうかでしょう。

小室 なぜその土地に行くかを見出せると、やらないよりはやったほうがいい。潰れるほどの赤字になるんだったら、それはやめるほうがいいですけど、お金がなんとかかなりそうだったら、思い切って行ってみる。行かなきゃわからないものってすごくあると思います。旅公演は、その間仕事が出来ないとかやっぱり大変なんです。それでもやるのは、新しいお客さんに本当に会いたいから。



撮影/原田直樹(n,photo)

北九州演劇祭に出かけたのですが、落ちました。2、3日仕事が手につかないほど悔しく、助成金獲得に燃えた結果、演劇祭参加よりいい経済状態で公演できました。あきらめなければなんとかなるものです。この作品は「古事記物語」をモチーフにしています。アンケートを見ると「古事記だから」という理由で足を運んでいただいた方が多かったのが予想外でした。北海道ではまずない理由でしょう。地域性を探る上で、演劇以外の部分での歴史を学ぶことも今後の交流企画のヒントがあるのかもしれない、と感じる出来事でした。(小室明子)

Meets! 飛ぶ劇場『あーさんと動物の話』 関連イベント: シンポジウム「地域劇団が旅に出る理由」
2007年11月3日[祝]—4日[日] 生活支援型文化施設コンカリーニョ 2007年11月3日[祝] 生活支援型文化施設コンカリーニョ

Meets! 劇団千年王国『イザナキとイザナミ〜古事記一幕〜』 関連イベント: シンポジウム「地域に生きる女性演出家」
2008年1月12日[土]—13日[日] ぼんブラザホール 2007年12月10日[月] カフェアートリエ